

中野正裕

柳瀬明彦

林 宰司



スティグリッツ/ウォルシュ
『入門経済学』第3版
新報社(2005年)
本体価格3500円

経済学に関する海外の優れたテキストは、理解すべき事柄の優先順位を明確にし、また重要な語句や概念を、具体例を用いてきわめて丁寧に解説しています。このテキストも、例えばトレードオフやインセンティブといった概念の重要性を序盤で強調しており、理論学習の目的や方向性を明確化し、さらなる興味を促すよう工夫しています。基礎理論の学習だけでなく、経済学的思考、論理的思考を学ぶ意味でも参考となる本です。

アメリカの経済学のテキストは、これでもかというくらい親切・丁寧に書かれています。このテキストも、経済学の知識がまったくゼロの状態の読者を対象に、インセンティブやトレードオフなど経済学の基本を学ぶ上での前提となる考えから説明を始め、100ページを過ぎ、経済学を学ぶための「頭」を作る準備が十分整ったところで、ようやく需要と供給の話が出てきます。無理なく経済学の学習を進めていけるテキストです。

前半の1～5章を精読すれば経済学の基礎(完全競争市場を前提とした経済学)がマスターできる。現実の経済問題をコラムとして織り交ぜながら読みやすく工夫してあるだけでなく、情報や不完全競争の経済学、技術とイノベーションなど、現代的な経済現象を読み解くために必要な新しい経済学の理解への接続を意識して書かれている。また、後半は経済理論だけでなく、金融、国際経済など様々な分野の理解を深めるのに役立つ。



伊藤元重
『入門経済学 第2版』
日本評論社(2001年)
価格(税込)3,150円

マクロ経済学、ミクロ経済学の2パートから構成され、さらにそれぞれが基礎部分と応用部分(展開)に分かれています。全般的に、数学的記述を最小限度にとどめ、重要な基本概念を平易に解説しています。なお、本文は480ページ余りと、ややボリュームがあるので、たとえば基礎部分を1年次にじっくり読み、応用部分は2年次進級後、本格的な理論学習をするさいの手引書として活用してもよいと思います。

扱っている内容は、極めて標準的なマクロ経済学とミクロ経済学の入門レベルで、それぞれの入門テキストが2冊合わさったようなものです。ただし、マクロ編では例えば財政・金融政策の効果の流れを説明するのにフローチャートを活用したり、またミクロ編では現実の応用事例を数多く取り上げるなど、読者の理解を助けるための著者独自の工夫が随所に見られます。各章末にある練習問題も程よいレベルで、また丁寧な解説付きです。

前半(Part1・2)をマクロ経済学、後半(Part3・4)をミクロ経済学の内容に費やし、それぞれ基礎と展開の4部構成となっている。ミクロ経済学・マクロ経済学の基礎を網羅しており、経済学の基礎を一通り学ぶことができる。私の個人的な趣味かもしれないが、初学者はミクロ経済学から先に学んだ方が理解しやすいと思われるので、後半のミクロ経済学から学ぶのがよいかもしれない。



福岡正夫
『ゼミナール経済学入門 第3版』
日本経済新聞社(2000年)
価格(税込)3,150円

ミクロ、マクロ理論の基礎だけでなく、経済体制、国際貿易や経済発展にも言及しており、テキストというよりは専門書として読める部分も多いのが特徴です。なお、ミクロ、マクロ部分でも、やや応用的なトピックスがいくつかとり上げられているのですが、初級書ではあまり扱われない専門用語についても、初学者にも分かるよう丁寧な解説が付けられており、中・上級書へと抵抗なく進めるような配慮がなされています。

私自身、学生時代にこの本を使って(旧版ですが)経済学を勉強しました。数式が多く使われておりレベルはやや高いですが、逆に言えば、入門書にありがちな「理論的厳密さが犠牲になっている」という懸念は、本書では皆無です。また社会的選択、国際経済、経済発展など上級レベルのトピックも扱っているため、大学入学から卒業まで長く使えるテキストでもあります。「あろう」「えまい」という著者独特の文体も楽しんでください。

第I部「経済の世界」は基礎的な経済学的思考方法に充てられ、第II部がミクロ経済学、第III部がマクロ経済学、第IV部「貿易・発展・体制」では経済循環、経済成長、国際経済まで網羅し、経済学の基礎理論を体系的に学習できるように構成されている。ミクロ・マクロ分野については、入門書としては少々難しい内容まで扱っているが説明は丁寧である。別冊の問題集を併用して勉強すれば、一層理解が深まるであらう。



岩田規久男
『経済学を学ぶ(ちくま新書)』
筑摩書房(1994年)
価格(税込)735円

ハードカバーのテキストのように、講義と併行してじっくり読み進めるのではなく、短期間に経済学の概要をコンパクトにつかむのに適した本です。ただし、扱われているトピックスには、簡単に流し読みできない部分(例えば価格弾力性についての数値計算など)が含まれていますし、理論分析が有用であることも理解できると思います。最終章では、経済学を学ぶうえで有益な参考文献のリストや経済学の体系図が親切にまとめられています。

新書ということもあり、「読み物」としての色彩がかなり濃い一冊。通常の経済学のテキストのような数式や図は、一切出てきません。文章だけで経済学の基本的な考え方を知りたい人にはお勧め。しかし、読む人にとっては、このような文章だけの説明では物足りない、あるいは逆に分かりづらく感じるかもしれません。そのような人は、最後の章にある文献リストを参考に、「次の一冊」をテキストに選んで学習していきましょう。

数理的な説明を用いずに経済学の本質を分かりやすく説明している。事例を交えながら経済学に必要な基本的概念である需要、供給、規模の経済、弾力性などを理解できるよう工夫されている。特に第8章「経済学の学び方」は、新聞や統計書の活用法、理論による理解の仕方など、経済学部生には有用である。新書で安価であるので、「お金がないので教科書を買えません」と言い訳する学生さんにも是非購入して読んでほしい。